



講演後のパネルディスカッションでは、4人の講演者の他、コーディネーターとして別府大学教授の後藤宗俊氏、またパネラーとして大分市教育委員会社会教育課主幹の秦政博氏にもご参加いただき、「戦国大名大友宗麟—その実像に迫る」というテーマで討議を行っていただきました。特にここでは旧府内絵図に描かれた戦国時代の街に討議の焦点があてられ、その実態について、遺構・絵図・字図古文書等から検討がなされた上、他の戦国大名の事例や同時代の遺跡などを踏まえた考察が行われました。さらにここで描き出された街の姿から大友宗麟の領国支配の特徴についても言及がなされました。その討議内容を簡単に要約すると、渡辺氏は、絵図に記された町名が天正年間(1573~92)の記録である「参宮帳」の中にみえる町の名前と一致する点が多いことから、ある程度絵図は当時の内容を反映したものと理解できること、そして武家屋敷やそれに関わるような町名がほとんど記入されていないことから、その街は町人中心の街と考えられるとの見解を述べられました。これを受けて秦氏は、絵図に描かれた寺社と現在のものとを比較し、その位置関係や距離関係がほぼ同じであることから、絵図にみえる街が実在していた可能性が高いこと、そしてその街は現在の元町・顕徳町・錦町、さらに坊々小路・塩丸弁といった地域に及び江戸時代府内城が新たに築かれると、それは城下町へそっくり移転させられ、大友時代の街跡は江戸時代にはほぼ農村化していたとの指摘がなされました。これを受けて松下氏は、上野大友館の遺構の残り具合や、江戸時代の当地の状況から判断して、中世の街の遺構がかなりいい状態で検出される可能性が高いと、草戸千軒町や尾道の発掘調査事例、また京都・鎌倉・博多などの調査事例などから指摘され、今後きちんとした調査事業が行われることを

期待されました。これに関連して、芥川氏は、宣教師の記録や史料等にみえる大友館の具体的な描写から、館の様子を復元し、これと発掘調査の成果とを刷り合わせていく作業が今後待たれるとの意見を述べられました。一方、宇田川氏は、絵図にみえる街を、当時の時代状況から判断すること、例えば中世の街と武器職人といった関係から(中世の館では余り武器職人の保家はみられないが、近世になるとそれが逆に多く置かれるようになり、そのため一般に武器職人も城下へ集住するようになる)その武器職人の集住の形跡がみられるのかどうかといった総合的な視点からも検討する必要があるとの意見を述べられました。またコーディネーターの後藤氏からは、万寿寺跡地から出た多くの遺物や博多遺跡の発掘調査の事例(天正14年の島津軍による博多焼き討ちの痕跡も確認された)などから、大友氏に関する多くの新事実が発掘調査等で明らかにされるだろうとの意見を述べられ、今後こうした調査が進められていくことを望まれて討議を終えられました。

編集後記

シンポジウム参加者333名という多さに改めて市民の方々の大友氏や宗麟に対する関心の高さに驚きを感じました。こうした声に応えるため、資料館では今後とも継続的に史料の収集や調査研究を進めていきたいと思ます。(M. T)

資料館ニュース No.21

発行 1993.1.31

大分市歴史資料館

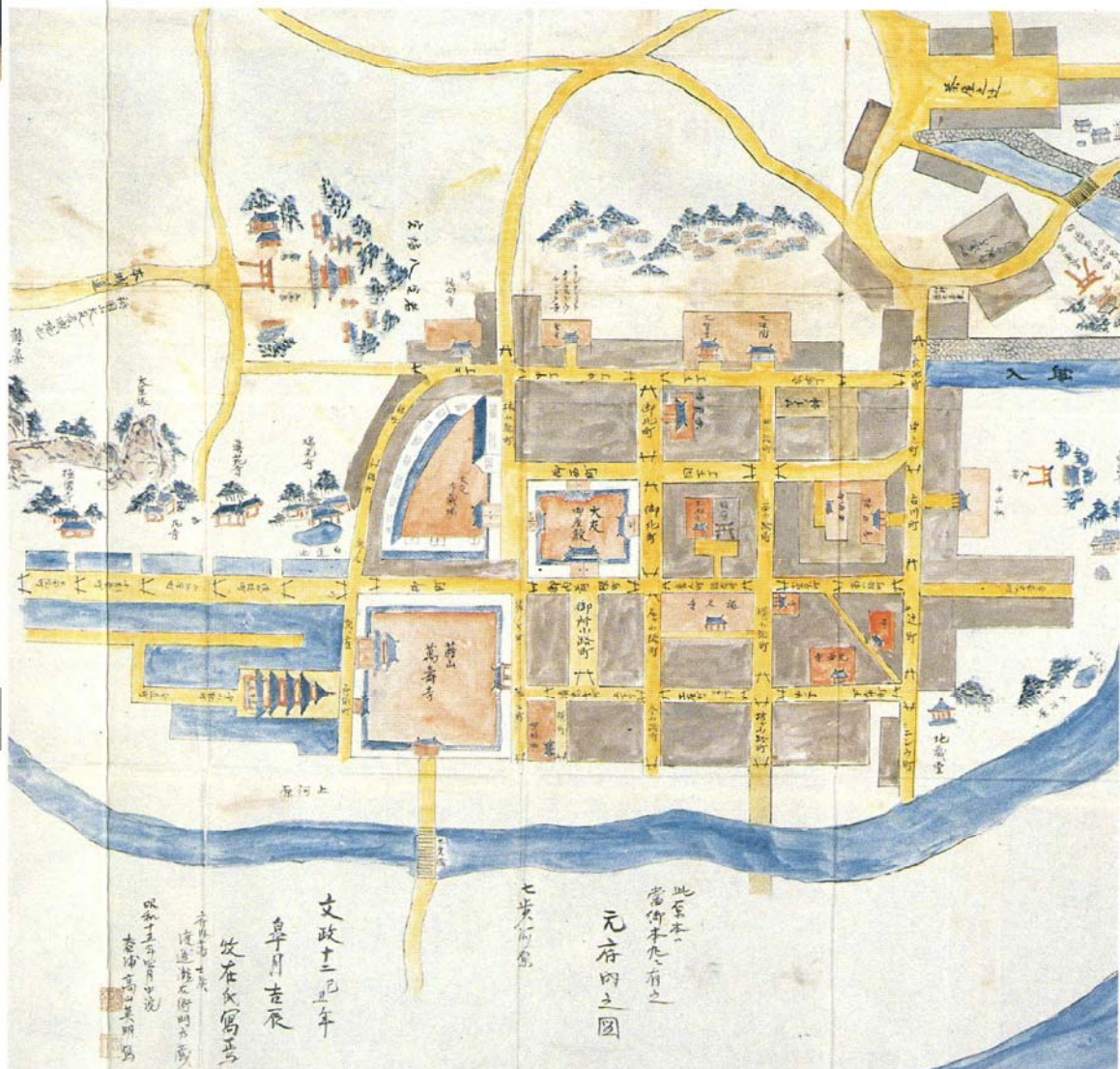
大分市大字国分960番地の1
〒870 ☎(0975) 49-0880

大分市

歴史資料館ニュース

1993 21
1.31

Oita City Museum

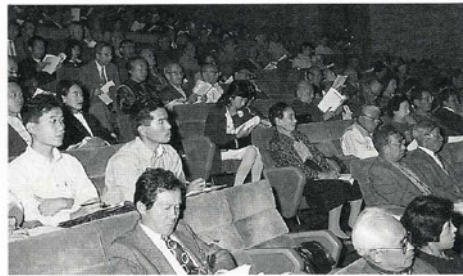


戦国時代府内街絵図(個人蔵)

資料館では、11月3日、大分市のコンパルホールの文化ホールを会場に、記念シンポジウム「戦国大名大友宗麟—その実像に迫る」を開催いたしました。このシンポジウムは、開館5周年記念特別展「覇権をめざした英雄たち—大友宗麟とその時代」の開催にともない、戦国大名としての宗麟像をはじめ、大友氏400年の歴史やその支配の実態について広く市民の方々に理解していただく機会として開催したもので、講師に大分大学名誉教授の渡辺澄夫氏、法政大学教授の芥川龍男氏、国

立歴史民俗博物館教授の宇田川武久氏、比治山女子短期大学教授の松下正司氏をお招きし、それぞれの研究分野からテーマに沿った内容でご講演いただきました。

その後のパネルディスカッションでは、別府大学教授の後藤宗俊氏、大分市教育委員会社会教育課主幹の秦政博氏にもコーディネーターならびにパネラーとして加わっていただき、大名大友宗麟像について、戦国時代の大大分（当時「府内」と呼ばれた）の街の問題から切り込んだ討論を行っていただきました。

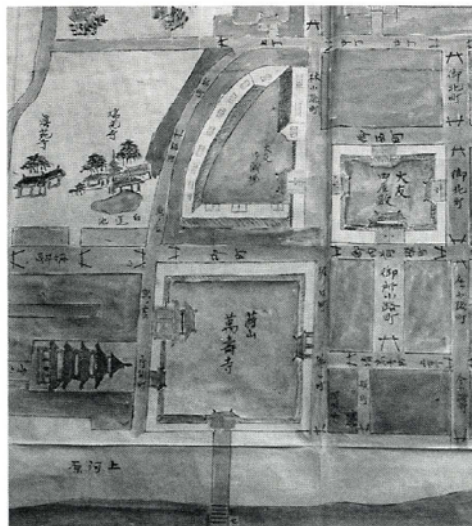


表紙 紹介

戦国時代府内街絵図

大友氏の拠点である豊後府内の戦国時代の頃の街の様子を描いた絵図で、昭和15年、渡辺龍右衛門方に所蔵されていたもの（府内城本丸にあった図面を文政12牧在氏が写し取った写本）を高山英明元大分市長（第4代大分市長〔在任：昭和4年7月～同7年6月〕、詩書をよくし、「春浦」と号す、晩年は画作も行った）が模写されたものです。「元府内之図」と書かれたこの絵図によれば、現在の元町・金池町・顕徳町にかけた一帯に、ほぼ正方形に近いかたちの整然と区画された街が築かれていたことが分かり、その街の中央には、四方を築地で囲まれた立派な門構えの大友屋敷のすがたが描かれ、またすぐ南隣にはその大友屋敷を上回る広大な敷地をもった御蔵場の様子が描かれています。さらに天下十利に数えられた万寿寺の大伽藍の様子や天文21年（1552）に建てられた府内教会（「ダイウスドゥ」）なども描かれ、当時の街のおおよそのすがたを知ることができます。辻や通りの要所には治安・防御のための木戸も設けられています。さらに街を縦横に走る道には41にもおよぶ町名が記入されており、多くの

町屋が軒を並べていたことが想像されます。宣教師の報告にその頃の府内の人口が8,000人とも8,000戸ともあり、そうした街の賑わいを彷彿とさせる絵図です。



① 大友氏と豊後

大分大学名誉教授 渡辺澄夫氏

渡辺氏の講演では、まず大友氏と豊後との関わりは、義父中原親能が初代大友能直に鎮西一方奉行職（のちに豊後国守護職、肥後国守護職、筑後国守護職へと分化・発展する）を譲渡した建永年間（1206～07）に始まると、しかし能直・2代親秀までは九州の地によって生活をした様子はなく、その間は守護代を派遣して豊後での職務を遂行していたと考えられると、またその役所は古国府にあったものと言われ、それが3代大友頼泰の代になり守護の職務遂行および荘園等の年貢徴収を全うする必要から豊後に生活の居を移さざるを得なくなり、それは大友屋敷が構えられた「勝津留（現在の野上ヶ丘の丘陵の一部から元町付近の低地にかけた一帯、その丘陵部は当時「高国府」と呼ばれ、国府ないしは国府役所の一部があったと想定される場所、その一画は字「屋敷」と呼ばれ、現在そこには中世の館の遺構が残っている）」の地頭職の譲渡を建久6年（1195）頼泰が叔父志賀能郷に望んだ頃から準備され、遅くとも文永年間（1264～75）の初め頃には当地へ下って来たと考えられると、そしてここを拠点に大友氏は、鎌倉末期に在国司職・税所職・惣追捕使職の役職等を手にし、また「高国府」の地に金剛宝戒寺・円寿寺といった寺を建て、さらに南北朝期には国衙領の大半の地頭職を所有するようになるなど、次第に国府の権力を吸収していき、そしてその過程で大友屋敷と国府は一体化し、旧国府の地に大友氏の強い支配が及んでいったと、それがまた大友氏の守護から守護大名への発展でもあったとの見解を述べられました。

戦国期になると、上野台地から下の元町へと政治の拠点が移され、その頃の街の様子を描いた絵図によれば、縦横ほぼ方形に区画された街の中央に大友役所と蔵所があり、その周囲に寺社と40余の町屋が築かれていたことが分かるものの、家臣の屋敷がほとんどみられず、また彼等がこの地に屋敷をもらったといった史料もほとんど残っていないことから武家中心というより町人中心の経済的な街ではなかったかと、またこれに関連し、府内の街や臼杵・佐賀関に当時「計屋」と呼ばれた度量衡を司る商人が置かれており、彼等を



講演風景



▲「豊後国海辺郡臼杵庄御検地帳」

通じ物の売買の統制を行っていた事実にも触れられました。

また永禄5年（1562）宗麟が臼杵の丹生島城に居を移した理由として、水軍の編成・強化があったとの考えを述べられ、その1つの成果が永禄12年若林氏ら海部衆を中心とした大友の水軍が大内輝弘の渡海を助け筑前立花城を攻める毛利軍の背後を突き撤退させる結果ともなったと、さらに臼杵は、文禄2年（1593）の検地帳に記された町や名請人の名前のほとんどが町人のものであることから、府内と同様、町人町といった性格が当時濃厚であったと、また臼杵に南蛮船が来た事実にも触れられ、対明・対南蛮貿易の拠点としても機能していたと言われました。さらに検地帳には府内の豪商であった中屋宗悦の子孫の名前もみえ、宗麟の臼杵移転に伴って移り住んだものと考えられると、そして府内の街はこれを契機に二極分化したものと考えを述べられました。

また鎌倉以来、大友氏の政治の拠点が古国府→上野ヶ丘→元町と南から北に向かって発展していった経緯は、大友氏の目が海上へと向けられていったことを象徴するものではないかとの見解も述べられました。

明治時代字図に見る 大友氏時代の府内街

大友氏時代府内街古図に見える町名

- | | |
|----------|-----------|
| ① (今在家町) | ㉒ 横小路町 |
| ② 辻町 | ㉓ (名ヶ小路町) |
| ③ (古川町) | ㉔ 御所小路町 |
| ④ 南小路町 | ㉕ 掘之口町 |
| ⑤ 小笠原町 | ㉖ 中之町 |
| ⑥ 西小路町 | ㉗ 坊ヶ小路町 |
| ⑦ (下市町) | ㉘ 工座町 |
| ⑧ 穴打町 | ㉙ 今小路町 |
| ⑨ 御西下町 | ㉚ (上市町) |
| ⑩ 下町 | ㉛ 横町 |
| ⑪ (中町) | ㉜ (清忠寺町) |
| ⑫ 上町 | ㉝ 今道町 |
| ⑬ (御北町) | ㉞ 寺小路町 |
| ⑭ (御西町) | ㉟ (中之町) |
| ⑮ ノコギリ町 | ㊱ ニシウ町 |
| ⑯ (稲荷町) | ㊲ 長国寺町 |
| ⑰ (唐人町) | ㊳ 林小路町 |
| ⑱ (桜町) | ㊴ (長池町) |
| ⑲ 御内町 | ・ (後小路町) |
| ⑳ 柳町 | ・ (小物座町) |
| ㉑ 魚之町 | ・ 千手堂町 |
| ㉒ 片側町 | ・ 三宝院町 |

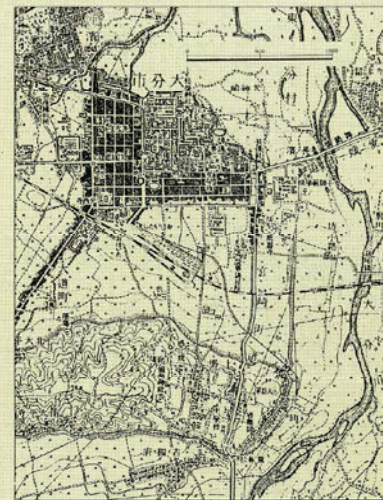
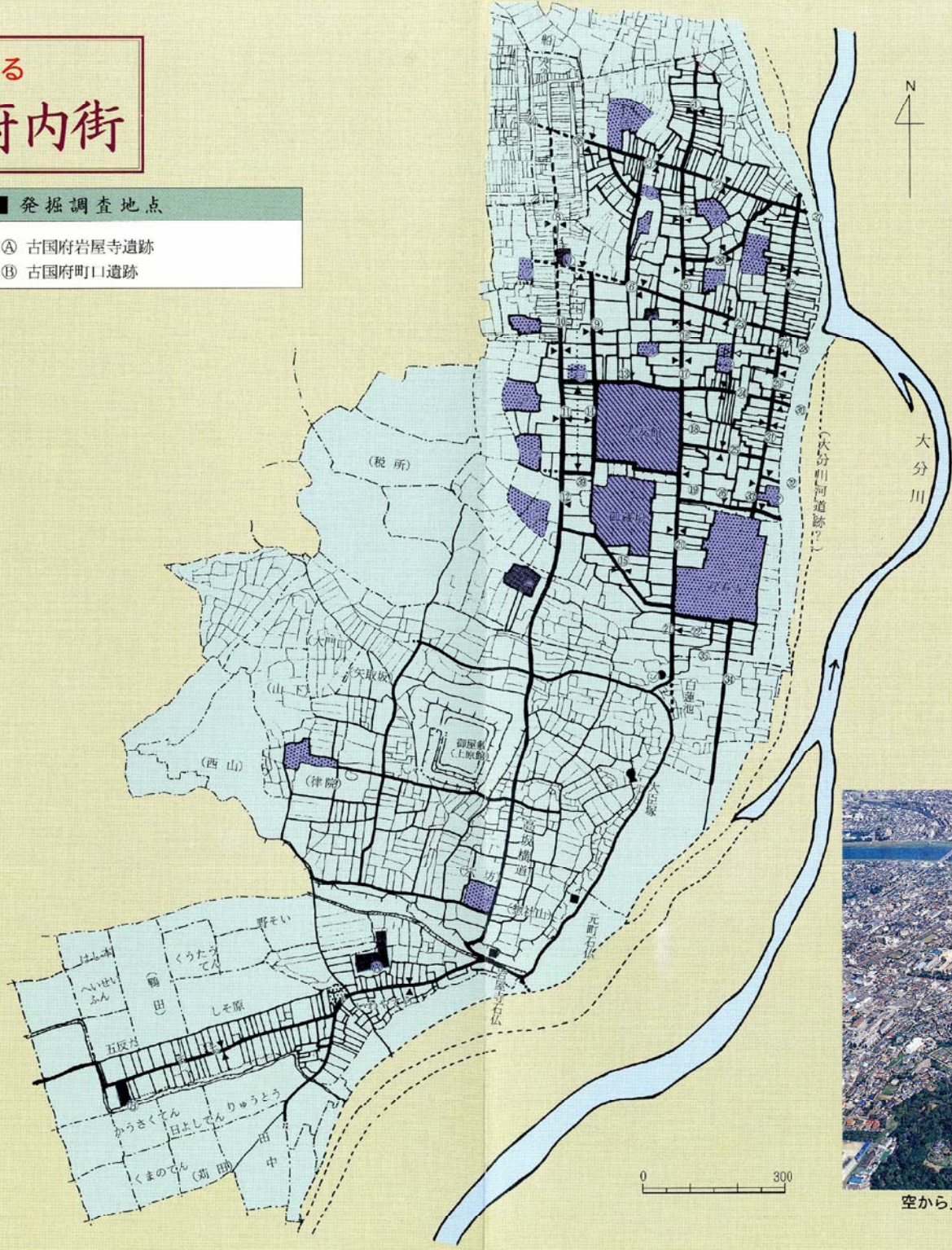
ゴチック体 - 天正16年参宮帳に見える町名
() - (新)府内城下町に見える町名

古図に見える社寺・現存する社寺

- | | |
|--------------|--------|
| イ 大智寺 | ㉗ 光西寺 |
| ロ 来迎寺 | ㉘ 妙嚴寺 |
| ハ 稲荷 | ㉙ 清忠寺 |
| ニ 若宮 | ㉚ 祐向寺 |
| ホ 円寿寺 | ㉛ 瑞光寺 |
| ヘ 金剛宝戒寺 | ㉜ 大雄院 |
| ト 三福寺 | ㉝ 称名寺 |
| ㊶ 善巧寺 | ㉞ 寺 |
| ㊷ サイノ神 | ㉟ 寺 |
| ㊸ 福田寺 | ・ 真花寺 |
| ㊹ 本光寺 | ・ 比丘尼寺 |
| ㊺ ダイヌウ堂(教会?) | ・ 極楽寺 |
| ㊻ (コレジオ?) | |

発掘調査地点

- ㊼ 古国府岩屋寺遺跡
- ㊽ 古国府町口遺跡



大正7年大分市街図



空から見た上野の大友館・大友氏時代の府内街一帯

2 大友宗麟の領国支配

法政大学教授 芥川龍男氏

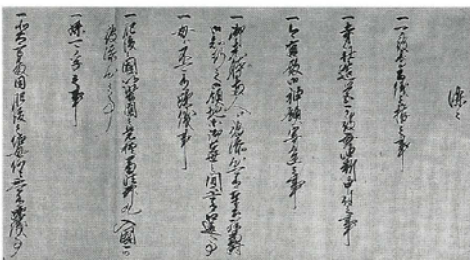


講演風景

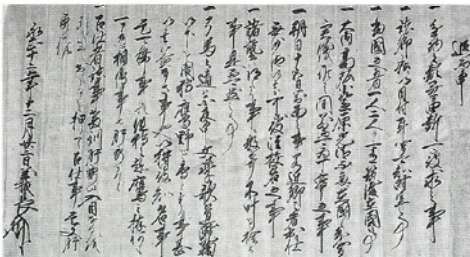
芥川氏の講演では、まず大友宗麟の九州6ヶ国守護職の獲得という栄誉は、曾祖父親治祖父義長、父親の義鑑の築き上げた支配基盤の継承・発展にあったことを、永正12年(1515)の大友義長の「條々」、天文19年(1550)の大友義鑑の「条々」の内容に触れながらお話いただきました。次に宗麟自身については、その行動から彼の思考の底流に常に対外的・国際的な視野があったと、それは本来意識や感覚また生活様式の異なる山間部、平野部、沿岸部がうまく合わさった豊後の国の風土にあって常に対外的なものを意識させられていったことと深く関わるものだろうとの見解を述べられました。またキリスト教の信者となって南蛮貿易を振興し、そのことによって時代を生き抜いたキリシタン大名という定義からすると、宗麟にはそうした一面が非常に薄いこと、それは彼の洗礼がザビエルに会って27年後のことであり、また公的な行事には万寿寺をはじめとする臨濟禅や作原八幡宮などの仏神を信奉していたことなどからも窺え、大名としてはむしろ旧来の格式に依然として依拠する面が強かったのと言われ、しかし一方で個人的にはキリスト教に浸透していった事実にも触れられ、比較的早く家督を息子義統に譲ったのもそうしたことからとの理解を示されました。

また宗麟の臼杵進出の理由として、瀬戸内海航路を経ず中央とを結ぶルート確保がその理由の1つとしてあったとの見解を述べられました。それは四国を経由し堺へ至る道で、宗麟の姉が四国の土佐中村の一条家に嫁いで

いる事実、またその地のお宮に堺の商人を通し鰯口を寄進させたり、また杉の用材を盛んに買い入れたりしていることからもうかがえると、さらに宗麟の「宗」の字が茶名と関わりがあることや、当時その中心地である堺の豪商のもとへしばしば宗麟の家臣らが茶会に招かれている事実などからみても、堺-四国-豊後のつながりは強く、その交易の場として府内より南に位置する臼杵の地が選ばれたものとの見解を示されました。また宗麟は博多の豪商島井宗室・神屋宗湛らとも交渉を持ち、中国や朝鮮の織物を手にしていたことにも触れられ、そしてこうした宗麟の海への志向は、多分に大内氏が日明貿易の指導権を得ることでその勢力を伸ばしてきた経緯を踏まえた行動であったものと、またそれが九州という地域性を活かし、他の大名たちに抜きん出る道と考えられたものとの話がなされました。



▲大友義長「條々」(部分)



▲大友義鑑「条々」



3 大友宗麟と大砲—鉄砲の伝来について

国立歴史民俗博物館教授 宇田川武久氏

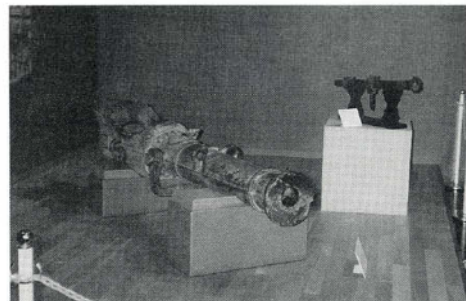


講演風景

宇田川氏の講演では、まず天文年間(1532~55)に日本に入った最初の鉄砲は携帯用の小銃であったこと、それが永禄末年頃(1570年代)になり「大鉄砲」とよばれる大型のものが登場し、織田・毛利・後北条氏などの戦国大名の陣中・城砦・軍船などに備えられ使用されていた事実について述べられ、当時それは宣教師の報告書によると「長銃」と呼ばれ、「大砲」とは全く別のものとして認識されていたと、そして大砲については「大砲と基装置」という記述から、本体に火薬を詰めた子砲を装填し砲丸を発射する艦船用の「フランキ」と呼ばれる大砲と理解されると、さらにこの大砲は、元和3年(1617)石見国津和野城の「石火矢、但入籠四ツ」の記録、また寛永20年(1643)会津若松城の「石火矢、但津川に在、入子卅一八天守に在」の記録などからみて、「石火矢」と国内で呼ばれたものと同一のものと考えられると述べられました。

このことから、永禄3年(1560)大友宗麟が室町幕府に献上した「石火矢」とはフランキ砲であると、また宣教師の同報告書に「豊後の王が鑄造せしめたる数門の小砲を除くは、日本国中に砲なきこと」とあったり天正12年(1584)の宗麟書状に「石火矢いよいよ数を増加すべし」とあることから、大友氏の領国でもこの種の砲が鑄造されていたものと考えられるが、多くの火薬を要し、起伏に富んだ日本の地形ではそれを移動させることが難しく、また島津氏に攻められるといった経緯からみても、あまりその威力は発揮されなかったものとの考えを述べられました。

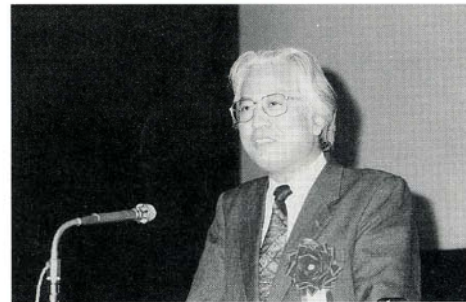
またその伝来経路として、日本国内に現存もしくは記録にみえるフランキ砲が東南アジア製のものとその形態が類似していることから、ヨーロッパや中国・朝鮮から輸入されたものというより、東南アジアからの伝来品といえるとの見解を述べられました。



▲フランキ砲

4 中世都市の発達—草戸千軒と中世考古学—

比治山女子短期大学教授 松下正司氏



講演風景

松下氏は広島県福山市草戸千軒町遺跡発掘の責任者として18年にわたり川底に埋もれた中世の町を発掘調査された様子をスライドを交えながら解説し、中世(鎌倉~室町時代後半)常楽寺の門前町として、また港町ないし市場町として栄えたこの町の姿が、発掘によっていかに明らかとなったかを説明し、考古学的調査の有効性をお話いただきました。氏はまた、大友時代の府内町にも触れ、1602年に廃棄され農地化された中世府内の街は、いまだ地下に良好な状態で保存されている可能性が高く、考古学的調査によって今後明らかにされることを期待すると述べられました。